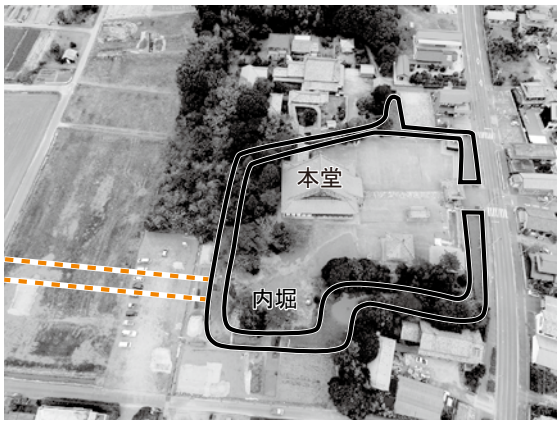
文化財ジャーナル vol.63

城郭伽藍の所以　本證寺伽藍絵図（2）

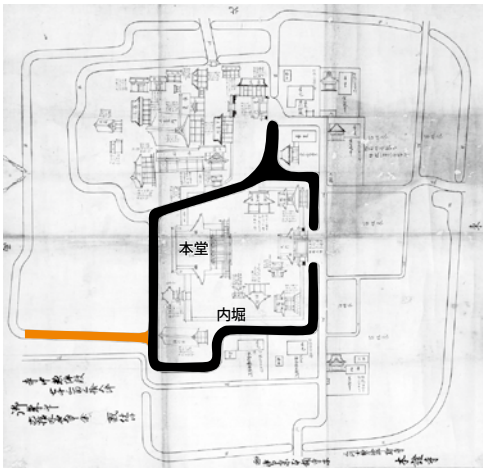
前回、本證寺が「城みたい」と言われるきっかけの一つになった「本證寺伽藍絵図」（以下、絵図）を紹介しました。市教育委員会は、この絵図をもとに現在の地形や明治～昭和期の地籍図、地元住民への聞き取り成果を照らし合わせて、現在地中に埋もれてしまっている外堀・内堀がどこにあったのか、位置の推定復元を試みました。そして、史跡整備を目指した情報収集のため、発掘調査で私たちの推定が正しかったのかどうか確認しています。

堀の位置を推理する

どのように堀の位置を推測・検証しているのか一例を紹介します。まず、現地の状況と絵図を見比べてみましょう。下の写真に示したとおり、本堂のある区画を囲む内堀は現在も残っています。その形を絵図と比べてください（黒色部分）。なんと、ほとんど同じ形をしています。200年以上も同じ形が保たれていたことに驚きです。こうなると、堀の他の部分がどうなっていたのか気になってきませんか。例えば、絵図の橙色の部分の外堀は、本当にあったのでしょうか。橙色の部分の外堀があると予想される場所に調査区を設定し、発掘しました。

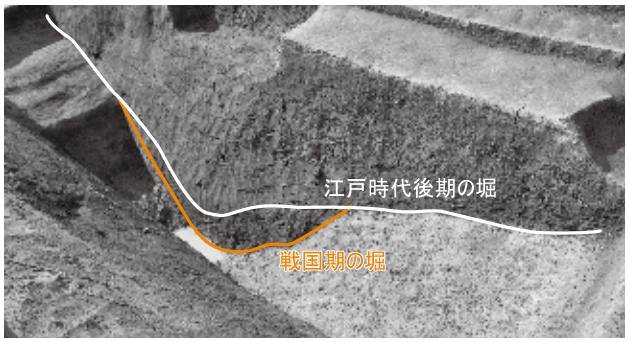


本證寺境内空撮（南から撮影）



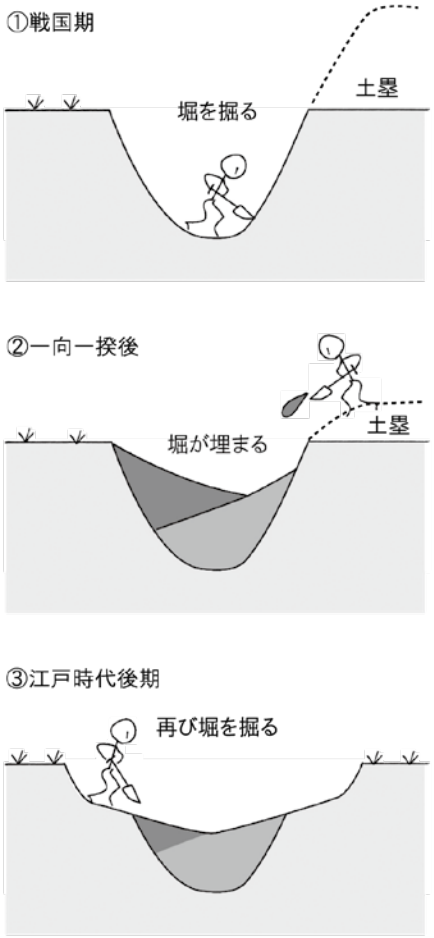
「本證寺伽藍絵図」寛政年間（1789～1801）

推理の結末は！？



外堀の断面

外堀は、想定どおりの場所にありました。橙色の部分の堀は、戦国期に掘られますが、一向一揆（1563）後にある程度故意に埋められたか、あるいは自然に埋まったかします。そして、江戸時代に寺の領地の範囲を明示するため掘り直されます。後期には堀を大々的に整備するために、幅を広げて掘られていたことが分かりました。



外堀の変遷

以上のような方法で、堀がどこにあったのか調査を続けていますが、時々想定外の発見があります。その話は、また次回にしましょう。